東日本大震災から10年

南三陸町の復興のあゆみ

2011年3月11日に発生した東日本大震災。宮城県の沿岸部に位置する南三陸町でも、多くの貴い命が犠牲となり、7割近くの建物が流出するなど、まちは壊滅的な被害を受けました。伊佐市は、震災直後から南三陸町への職員派遣や物資支援を行い、復興を全力で後押ししてきました。

そんな南三陸町は、令和2年10月に復興祈念公園全面開園を迎え、住宅・公共施設の再建、各種インフラの整備も復興計画通りに完遂し、次のステップへと歩みを進めています。

今月号では、南三陸町と伊佐市とのご縁を振り返り、復興のあゆみを紹介します。

まちの人口：12,404 人
（令和3年1月末）

伊佐市からの派遣職員数
長期：12 人　短期：40 人

南三陸町　復興の歩み

2011 平成 23 年

3.11　東日本大震災

震災直後の混乱の中、被害が大きかった東北の沿岸部の市町村に対し、伊佐市としてなにか支援ができないかと申し出たところ、南三陸町が受け入れを希望。

4.5 ～ 5.27　伊佐市職員短期派遣・支援物資の送付（延 40 人）

12.13　伊里前福幸商店街オープン

2012 平成 24 年

2.25　志津川福興名店街オープン
（仮設南三陸さんさん商店街）

4.1　伊佐市職員長期派遣開始

2015 平成 27 年

2.2　災害公営住宅の入居開始（枡沢）

10.4　津波で流出した戸倉小学校落成式

10.9　伊佐市・南三陸町の「災害等における相互応援協定」締結

被害を受けた市町の要請に応じて救援や応急復旧、必要な職員派遣や食糧・資機材を提供することを約束

12.14　南三陸病院・総合ケアセンター南三陸開業

市内に広がる活動

・福かざり（伊佐市商工会女性部）
・干し柿（羽月西小学校）

2016 平成 28 年

6.1　南三陸町地方卸売市場の完成式典
10.30　三陸縦貫自動車道志津川 IC 供用開始
11.19　三陸復興国立公園　南三陸・海のビジターセンターオープン
12.31　防災集団移転促進事業完了

2018 平成 30 年

10.18　志津川湾ラムサール条約湿地登録

2019 令和元年

9.2　南三陸消防署開署式

2017 平成 29 年

3.3　さんさん商店街本設オープン
4.23　ハマーレ歌津本設オープン
6.5　歌津総合支所開庁
7.15　サンオーレそでうはま海水浴場オープン
9.3　南三陸町役場新庁舎開庁

2019 平成 31 年

2.16　三陸縦貫自動車道歌津北 IC 供用開始（町内全線開通）
4.25　生涯学習センターオープン

2020 令和2年

10.12　南三陸町災害復興祈念公園全面開園
10.28 ～ 29　南三陸町から伊佐市・羽月西小学校へ感謝状贈呈

2021 令和3年～

「あの日のニュース」

２０１１年10月に出版された「河北新報のいちばん長い日」の巻頭に、『「白々と悪夢の夜が明けた…」津波に遭遇し、一緒に避難した女性が目の前で溺死するのを目撃した記者は、震える手で肉筆の原稿を書き始めた』、『「ごめんなさい、ごめんなさい…」ヘリから被災地を空撮したカメラマンは、眼下で助けを求める被災者へ必死に詫びる同乗者のつぶやきを聞いた』とあります。

この本は、宮城県を中心に東北6県を発行区域とする河北新報社の記者から集めた、取材行動記録を基に編集されたものです。

被災地にある新聞社として、伝えなければ、今こそ東北のためにと、肉親を失いながらも職場にとどまった記者、避難所から出勤して書き続けた記者もいました。

また一人の記者は、県の発表で「○○地区…○○地区壊滅」と繰り返される言葉の意味が理解できなかったそうです。これまでの取材で〝壊滅〟という言葉を聞いたことがないし、原稿でも書いたこともない、生涯忘れられない言葉だと振り返っています。

会社のシステムは使えない状態でしたが、新潟日報の協力によって、震災発生日の午後10時には『―宮城震度7　M8・8大津波被害―』の見出しで号外を完成させています。

販売所は安否確認が忙しく、手が回らないので、河北新報の営業や事業部などの職員が避難所へ届けることになりましたが、「こんな夜中に号外配って意味あるのか」、「停電で明かりがない避難所では読めないだろう」と疑問を抱きながら避難所の体育館に到着しました。

ドアを開けると避難者が目の前にあふれていて、暗闇で目を凝らすと、毛布をかぶり体育座りして静かに並ぶ避難者たちの姿。何が起こっているのか、次に何が起こるのか、誰もわからないから不安で固まっているという様子。

静寂に耐えられなくなった職員が「河北新報です。号外です」と控えめな声で言うと、避難者たちが一斉に立ち上がり、われ先にと号外を求め、用意したものは数分で完配。

当時、現場で配布していた職員の方が、今は記者になって南三陸町を担当しているので、直接お話を聞くことができました。

「携帯電話の画面の明かりを頼りに読む人、非常口の緑の表示灯にあてて読む人、被害状況を初めて知った人が多く、むさぼるように号外を読んでいたよ」

震災発生から2か月、紙面にテレビ欄が復活、そして当事者の証言に基づいた被災状況の再現シリーズが始まり、その一つに『―南三陸消防団　指令途絶え、それでも前へ―』が掲載されました。▼大津波で町役場、警察・消防署も飲み込まれ、災害対策の指令機能が完全に失われた中、地震発生翌日午前7時、生存者の救出に向かったのは町山間部入谷地区の消防団員70人だった。３ｍの高さにもなる瓦礫は地元の建設会社が重機で取り除き、人が通れる道を確保。数人ずつのグループになり、街を見渡せる場所に辿り着いたとき、団員は奇妙な感覚になる。「街がなくなって、自分がどこにいるのか分からない」

骨組みだけになった防災庁舎を過ぎた頃、高台にいた警戒役の団員が「上がれー、戻れー」と叫んだ。その声に、津波が来る、と動揺したが、後方避難場所までの距離と、めざす救出先（志津川病院）までの距離、進むか戻るか、屋上に人影も見えた、助けに行きたい。６人の中で最年長の阿部さんの判断は早かった。「ただでは帰れない、行くぞ」

辿り着いた病院には２３０人が孤立していた。会議室で一夜を過ごした入谷出身の患者は「まさか（自衛隊より早く）陸から助けにきてくれるとは思わなかった」と振り返った。

６人はすぐ、避難経路の確保に動き、屋上へ続く階段の瓦礫も撤去した。水位が下がったのをみて、今しかない、と避難誘導を始め、病院を後にして間もなく、自衛隊のヘリが屋上に着陸した。▲

阿部さんは「団員の安全を考えると、無謀だったかもしれない。だが、あの時は俺たちしかいなかったんだ」と話しています。

震災発生後、膨大な数の取材陣がいましたが、潮が引くように震災報道から切り上げ、被災者に寄り添い続けたのは、やはり地元紙です。

今朝の新聞も普段どおり、地域の話題や情報と一緒に、「備える」大切さを伝える防災啓発の記事が掲載されています。

まもなく、震災から10年です。

（柿ノ迫秀美）

【参考】
河北新報のいちばん長い日
～震災下の地元紙～
※13ページをご覧ください。